

【原著論文】 在日ブラジル人児童の心理適応 (1)

——集住地区と散在地区の比較——

金山 聖 菜

金城学院大学

The Psychological Adjustment of Japanese-Brazilian Children

——Comparison with gathered areas and scattered areas——

Seina Kanayama

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

In this study, the psychological adjustment of Brazilian children living in Japan was examined by comparing a group of children from schools that have a large number of Brazilian students with a group of children from schools that do not. The Kid-KINDL^R and a portion of the Youth Self Report were completed by 114 Japanese-Brazilian and 152 Japanese children in the fifth and sixth grades.

The results indicated that Japanese-Brazilians have higher self-esteem than Japanese children irrespective of the school they attend. Further, Japanese-Brazilians attending schools with a higher concentration of Brazilians have higher Hikikomori and Offensive Behaviors scores than those in schools with a lower concentration of the same. Having a high number of classmates of the same nationality was not related to positive adjustment among Japanese-Brazilian children.

Key words: Brazilian Children (ブラジル人児童), psychological adjustment (心理適応), QOL (生活の質)

要 約

本研究では在日ブラジル人児童の心理適応を、ブラジル人が多く在籍している学校の生徒と通常の学校の生徒で比較・検討した。心理適応の指標として、子ども用KINDLとYSRを採用し、100名の在日ブラジル人児童と152名の日本人児童に質問紙調査を実施した。

その結果、ブラジル人集住学校に通う在日ブラジル人児童は、散在学校の在日ブラジル人児童よりも、「ひきこもり」得点や「攻撃的行動」得点が高い傾向にあることが明らかになった。これにより、同じ国籍のクラスメイトがいるかどうかは在日ブラジル人児童の良好な心理適応に強く関係しているわけではないということが示唆された。

キー・ワード：ブラジル人児童 (Brazilian Children), 心理適応 (psychological adjustment), QOL (生活の質)

I. 問題と目的

出入国管理及び難民認定法が改定された1990年以降、就労目的で来日するブラジル人が増加しており、それに伴って来日するブラジル人児童の教育的問題が浮上している。その中の一部として、第1言語も第2言語も年齢相応のレベルに達しないダブルリミテッド・いじめ・進路の問題・不登校・不就学・非行などがこれまでにあげられている(清水・志水, 2001 清水, 2006 杉山, 2008 新海ら2001 森田2007 西田2011)。在日ブラジル人児童のこうした問題には、特有の背景がある。たとえば、帰国と再来日を繰り返すため、帰国中に児童の学業が中断した状態になること、長時間の労働で親の在宅時間が短く親子間の繋がりが乏しいこと、児童が親の言語理解を手伝う役割を担わなくてはいけないことなどである。

このように、不安定な状況のもとで、自我が健全に成熟するのは容易ではないだろう。とくに、中学校にあがると試験の結果や学力偏差値により、否応なく周囲と比較されるようになるため、早々に自分の将来に見切りをつけてしまうのかもしれない。あるいは、こうして急激に下がる自己肯定感が、彼らを不登校・非行に駆り立てているとも考えられる。

さて、このように日本の生活に適応できていないと思われるブラジル人児童でも、先行研究の質問紙では日本人児童より高い適応感を示すという結果が出ている(児玉ら, 2007 杉岡, 2007 掛札, 2004)。また、ストレスの多い状況にいるにもかかわらず、ブラジル人児童のレジリエンス(精神的回復力)は高い状態に保たれていると示した研究もある(古田ら, 2011)。さらに、松本らの研究では、学校満足度は低いにも関わらず、自尊感情は日本人児童より高いという結果になっている(松本ら, 2011)。こうした結果が出た理由として、他国と比べて日本人児童は自尊感情や自己肯定感が低いということ(古荘, 2009)だけではなく、これらの調査がブラジル人児童の在籍率が高い学校で実施されていることも影響していると考えられる。コミュニティの強さを文化的背景としてもつブラジル人にとって、ブラジル人集住地区に住んでいるかどうか

が非常に大きな要因になっているはずである。

白山(2008)は教育学の視点から集住地域と散在地域のブラジル人児童の差異について比較検討しているが、心理学的手法で地域別に検討した研究は見当たらない。そこで、本研究では、ブラジル人集住地区と散在地区、それぞれのブラジル人児童の適応を量的な分析で比較し、その差異を検討することを取り上げる。

II. 方法

(1) 調査対象

ブラジル人の居住数が多いX県、Y県の小学校5,6年生の児童252名(内、ブラジル国籍は100名)。また、その担任教師や日本語指導の担当者。小学校や市町村が開催する日本語教室など全20か所で実施。その内3か所は、ブラジル人在籍率が50%を超えている公立小学校である。

(2) 調査時期

20XX年度3学期から、20XX+1年度1学期までの期間。

(3) 調査内容

調査は児童への質問紙と描画、教師へのアンケートからなる。質問紙は、年齢、性別、家族構成、来日時期を問うフェイスシートと、Ravens and Bullinger(1988)が開発したKid-KINDL^R(Questionnaire for Measuring Health-Related Quality of Life in Children, Revised Version)の日本語版(小学生版QOL尺度;柴田・根元・松嵩・田中・川口・神田・古荘・奥山・朝倉, 2003。全24項目, 5件法)、子どもの行動チェックリストの自己記入版(YSR; Youth Self Report)の項目の中の、「ひきこもり尺度」と「攻撃性尺度」全26項目, 3件法)で構成される。また、学校によって、オリジナルの質問紙の内容と誤差が生じない程度に、分かりやすい日本語に修正した(「痛い目に合わせるぞ」→「殴るぞ」など)。

教師へのアンケートは、外国籍児童のみ、その(i)国籍、(ii)日本語能力、(iii)日々の生活において気になる点を記入してもらった。日本語能力に関しては、①日常生活における日本語に困難があるレベル(日本語能力低群)、②日常生活における日本語

に、部分的に困難があるレベル（日本語能力中群）、
 ③日常生活に問題がないレベル（日本語能力高群）、
 の3段階で評価してもらった。また、気になる点として、
 「学習」「友人関係」「生活・健康」「家庭」「発達障害」
 「その他」と提示し、言語に付随する気になる点もあれば記入してもらった。

(4) 調査手続き

ブラジル人在籍率の高い3校の小学校においては、
 集団法で担任の教師によって実施。その他に関しては、
 日本語指導の担当者などが個別について実施した。
 各学校、空いた時間や授業時間を用いて実施してもらった。
 質問紙について、日本語の意味などを聞かれた際には返答してもらい、
 それ以外の質問に関しては「自由に答えて下さい」と返答するように指示した。

Ⅲ. 結果

それぞれのデータ数が少ないため、項目ごとに欠損値として扱った。
 また、ブラジル人在籍率が50%を超える公立の小学校に通っているブラジル人を
 集住地区のブラジル人とし、それ以外を散在地区のブラジル人として分類した。

1. 尺度の検討

(1) 因子

日本語版QOL尺度について、本来の尺度構成に従って信頼係数を確認したところ、「身体的健康」 $\alpha=.38$ 、「精神的wellbeing」 $\alpha=.64$ 、「自尊感情」 $\alpha=.81$ 、「家族」 $\alpha=.64$ 、「友人」 $\alpha=.60$ 、「学校生活」 $\alpha=.44$ と著しく低いことが示された。そこで、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った（Table1）。固有値の減衰傾向と解釈の可能性から、4因子を抽出した。因子負荷量.40以上の項目を採

Table1 QOL 因子構造

No.	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4
第1因子 「学校生活」(全5項目) $\alpha=.76$					
17	私は友達と一緒にいろいろなことをした。	.81	-.03	.10	-.13
19	私は友だちとうまくやっていた。	.73	-.05	.07	.15
18	私は友だちに受け入れられてきた（きらわれていなかった）。	.57	-.09	.04	.08
5	私は楽しかったし、たくさん笑った。	.55	.21	.06	.07
22	私は学校はおもしろいと思った。	.43	.23	-.14	-.05
第2因子 「自尊感情」(全4項目) $\alpha=.81$					
10	私はいろいろなことができる感じがした。	.03	.82	.06	-.05
9	私は自分に自信があった。	-.01	.80	-.01	-.03
11	私は自分に満足していた。	-.12	.65	-.10	.13
12	私はいいことをたくさん思いついた。	.12	.57	.10	.16
第3因子 「精神的不安定」(全8項目) $\alpha=.75$					
3	私は疲れてぐったりしていた。	.07	-.07	.54	.06
20	私は自分がほかの人たちとくらべて変わっている気がした。	.08	.06	.53	-.05
8	私は何もないのにこわくなったり、不安に思った。	-.02	-.02	.51	-.04
7	私は孤独（ひとりぼっち）のような気がした。	-.33	.11	.49	-.01
16	私は親（父または母）にやりたいことをさせてもらえないと感じた。	-.19	.10	.49	-.02
23	私は自分の将来（これから先のこと）について心配していた。	.07	.04	.46	-.15
6	私はつまらなく感じた。	-.27	-.02	.45	.07
24	私は悪い成績をとらないか心配していた。	.20	-.04	.41	-.10
第4因子 「家庭生活」(全2項目) $\alpha=.74$					
13	私は親（父または母）とうまくやっていた。	.08	-.03	.09	.76
14	私は家で気持ちよく過ごしていた。	.12	.07	-.08	.59
残余項目					
4	私は元気いっぱいのように感じた。	.33	-.03	.09	.76
2	私は痛いところがあった。	.16	-.15	.38	.14
1	私は病気だと思った。	-.05	.07	.29	-.04
21	学校での勉強は簡単だった（よく分かった）。	-.01	.08	-.10	.37
15	私は家でけんかをしていた。	.19	-.06	.18	-.38
因子間相関					
			.31		
			-.40	-.17	
			.50	.27	-.43

用し、いずれの因子にも低い値を示した項目は除外した。第1因子は、「私は友だちといっしょにいろいろなことをした」「私は友だちとうまくやっていた」「私は友だちに受け入れられていた」などに高い因子負荷量を示しており、学校生活に関する項目であるため“学校生活”因子と命名した。第2因子は、先行研究と同様であり、「自尊感情」とした。第3因子は、「私は疲れてぐったりしていた」「私は自分がほかの人たちとくらべて変わっているような気がした」「私は何もないのにこわくなったり、不安に思った」などに高い因子負荷量を示しており、精神的な不安定さを示す項目であるため、“精神的不安定”と命名した。第4因子は、「私は親(父または母)とうまくやっていた」「私は家で気持ちよく過ごしていた」という家庭生活に関する項目であるため、“家庭生活”と命名した。なお、各因子の α 係数を算出したところ、学校生活($\alpha=.76$)、自尊感情($\alpha=.81$)、精神的不安定($\alpha=.75$)、家庭生活($\alpha=.74$)それぞれの因子について十分な信頼性があることが

確認された。

YSRの攻撃性とひきこもりに関しても、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った(Table2)。固有値の減衰傾向と解釈の可能性から、先行研究と同じ2因子を抽出した。因子負荷量.30以上の項目を採用し、いずれの因子にも低い値を示した項目と同程度の値を示した項目は除外した。第1因子の項目は先行研究と同じであったが、第2因子の項目については、2項目を残余項目とした。したがって、先行研究と同様に第1因子を“攻撃性”第2因子を“ひきこもり”と命名した。なお、各因子の α 係数を算出したところ、ひきこもり($\alpha=.64$)についてはやや疑問が残るが、今回はそのまま因子として分析をすすめることとした。攻撃性($\alpha=.85$)、については十分な信頼性があると結論した。

(2) QOLとYSRの相関

QOLの「学校生活」「自尊感情」「精神的不調」「家庭生活」と、YSRの「ひきこもり」「攻撃性」に関する相関係数を算出したところ(Table3)、「学校

Table2 YRS因子構造

No	項目内容	因子1	因子2	共通性
第一因子「攻撃性」「攻撃性」(全18項目) $\alpha=.85$				
23	わたしは他の子よりそうぞうしい(うるさい)。	.70	-.19	.39
3	わたしは他人にいじわるだ。	.63	-.01	.38
1	わたしはよく言いあらそいをする。	.61	-.10	.32
13	わたしはよくわめく(大声をあげてさわいだりする)。	.61	-.10	.31
9	わたしはよくつかみあいのケンカをする。	.58	-.05	.31
17	わたしはしゃべりすぎる。	.56	.01	.27
11	わたしは人に暴力をふるう。	.55	.11	.32
20	わたしは人に「痛い目にあわせるぞ(なぐるぞ)」などとおどす	.54	.21	.30
18	わたしは他人をよくからかう。	.53	.02	.45
2	わたしはよく自慢する。	.49	-.11	.20
7	わたしは学校で言うことをきかない。	.48	-.01	.22
19	わたしはかんしゃくもちだ(怒りっぽい)と思う。	.42	.17	.29
6	わたしは自分の持ち物をこわす。	.38	.10	.20
4	わたしは人の注目をたくさんひこうとする。	.36	.02	.14
26	わたしは見せびらかしたり、おどけたりする。	.35	.18	.17
15	わたしはがんこだ。	.34	.12	.23
8	わたしは人にしつとする(うらやましがる)。	.32	.11	.15
5	わたしは他人の持ち物をこわす。	.31	.01	.10

第2因子「ひきこもり」(全6項目) $\alpha=.64$				
21	わたしはあまり元気が出ない。	-.02	.64	.40
22	わたしは楽しくなく、悲しく、落ち込んでいる。	-.00	.55	.29
10	わたしは他人といるよりひとりでいたい。	-.01	.49	.23
24	わたしは人とかかわりあいにらないようにしている。	.10	.47	.28
25	わたしは内気(はずかしがり)だ。	-.15	.36	.10
14	わたしは人に打ち明けなくて秘密にする。	.02	.36	.13

残余項目				
16	わたしは気分や感情が突然変わる。	.23	.31	.23
12	わたしは絶対にしゃべらない。	-.11	.20	.03

因子間相関			.54	

Table3 QOL, YRSの相関係数

	学校生活	自尊感情	精神的不調	家庭生活	ひきこもり
自尊感情	.38 ***				
精神的不調	-.32 ***	-.15			
家庭生活	.44 ***	.28 ***	-.34 ***		
ひきこもり	-.47 ***	-.20 **	.51 ***	-.32 ***	
攻撃性	-.23 ***	-.03	.44 ***	-.32 ***	.39

*** = $p < .001$ ** = $p < .01$

Table4 ブラジル人地区比較

	集住ブラジル人 (n = 69)	散在ブラジル人 (n = 31)	t値
学校生活	3.94 (.76)	4.06 (.82)	-.72
自尊感情	3.32 (.98)	3.35 (.87)	-.16
精神的不調	2.18 (.63)	2.20 (.84)	-.16
家庭生活	4.28 (1.02)	4.10 (1.17)	.80
攻撃性	1.52 (.33)	1.39 (.37)	1.76 †
ひきこもり	1.63 (.37)	1.47 (.42)	1.88 †

† = $p < .10$

Table5 日本語能力による比較

	低群 a (n = 17)	中群 b (n = 32)	高群 c (n = 49)	F	
学校生活	3.76 (.76)	3.88 (.74)	4.17 (.67)	3.05 †	a < c
自尊感情	3.60 (.83)	3.18 (.96)	3.38 (.93)	1.28	
精神的不調	2.36 (.58)	2.37 (.71)	2.02 (.67)	3.18 *	c < b
家庭生活	4.28 (1.07)	4.16 (1.01)	4.25 (1.11)	.11	
攻撃性	1.61 (.22)	1.48 (.42)	1.45 (.32)	1.29	
ひきこもり	1.74 (.36)	1.66 (.41)	1.50 (.36)	3.34 *	c < a

* = $p < .05$ † = $p < .10$

生活」と「自尊感情」「家庭生活」に正の相関がみられ ($r = .38, p < .001, r = .44, p < .001$), 「学校生活」と「精神的不安定」「攻撃性」「ひきこもり」に負の相関を示した ($r = -.32, p < .001, r = -.23, p < .001, r = .47, p < .001$)。次に「自尊感情」と「家庭生活」も正の相関がみられ ($r = .28, p < .01$), 「自尊感情」と「ひきこもり」に負の相関がみられた ($r = -.20, p < .01$)。また、「精神的不安定」と「攻撃性」, 「ひきこもり」に正の相関がみられ ($r = .44, p < .001, r = .51, p < .001$), 「家庭生活」とは負の相関がみられた ($r = -.34, p < .001$)。さらに、「家庭生活」と「攻撃性」, 「ひきこもり」において負の相関がみられた。 ($r = .32, p < .001, r = .32, p < .001$) 「攻撃性」と「ひきこもり」において正の相関がみられた ($r = .39, p < .01$)。

2. QOL・YSRの比較

集住ブラジル人・散在ブラジル人の2群比較

日本人を除外して、集住地区に住むブラジル人と

散在地区に住むブラジル人で地区差がみられるかを検討するため、対応のあるt検定により比較した (Table4)。その結果、集住地区のブラジル人は散在地区のブラジル人より攻撃性得点やひきこもり得点が高い傾向にあることが明らかとなった ($t(100) = 1.76, p < .10, t(102) = 1.88, p < .10$)。

3. ブラジル人の日本語能力による検討

日本語能力によって個人の適応に差があるかをみるため、対応のない一要因分散分析を実施した (Table5)。その結果、「学校生活」において10%水準で日本語能力の群間による主効果に有意な傾向がみられた ($F(2,100) = 3.05, p < .10$)。多重比較の結果、日本語能力低群より日本語能力高群の方が「学校生活」が高いことが明らかとなった。つまり、日本語能力が高い方が満足な学校生活を送れるということが分かった。次に、「精神的不健康」と「ひきこもり」において、5%水準で有意差がみられた ($F(2,94) = 3.18, p < .05, F(2,100) = 3.34, p < .05$)。

多重比較を実施したところ、(Turkey法, $p < .05$), 「精神的不健康」においては日本語能力中群の方が日本語能力高群よりも高く、「ひきこもり」においては日本語能力低群の方が日本語能力高群よりも高いことが分かった。

IV. 考察

集住地区に住むブラジル人児童

上述のように、集住地区で生活するブラジル人児童は、日本人児童に比べて自尊感情得点が高いことが明らかとなった。その一方で、散在地区のブラジル人児童と比較すると、「ひきこもり」得点や「攻撃的行動」得点が高い傾向にあるという結果となった。

まず、「ひきこもり」得点の高さについて考察する。既述のように、本研究における「ひきこもり」の内容として、抑うつや内向的傾向を含んでおり、集住ブラジル人児童は、同郷の生徒に囲まれているため、同じブラジル人同士で悩みや考えを打ち明けやすいように思われるが、かならずしも同郷の存在が個人の内的適応に貢献するわけではないようである。同郷のクラスメイトが少数しかいない場合は、お互いが分かりあえる貴重な支えとして機能する可能性が高いが、本研究で調査対象となったクラスの半数以上がブラジル人児童であるような学校の場合には、同郷同士であっても国籍をもとにした「特別な結束」はないのかもしれない。むしろ、教師を始めとする周囲の日本人からまとめて「外国人」という大枠で捉えられることで、個人が抱える学校生活での苦しさや悩みには目が向けられづらくなる可能性も考えられる。

次に、集住ブラジル人の「攻撃的行動」得点の高さについて述べる。集住地区のブラジル人は散在地区のブラジル人と違って、「見慣れた存在」であり、特別扱いされることはないという点が関係していると考えられる。白山(2008)は、ニューカマー集住地区の教師には外国人児童生徒というカテゴリーが共通理解されていると述べている。その上で、「取り出し」や「通訳」などの支援策を駆使しようとするというが、個々の生徒が表出する課題に担任が試

行錯誤する散在地区での対応と比較すると、子どもにとっては、「自分のためにやってもらえている」という感覚を抱きにくいかもしれない。

また、同郷の仲間の存在が、不適応行動を助長している可能性も考えられる。児島(2006)は同化志向の強い日本の学校で、押しつぶされずに生き抜いていくためには、個人の力だけでは弱すぎる場合が多いため、仲間と結託してその場その場の抑圧的な状況を乗り切ると述べている。そうした抑圧的な学校規範をかわすスキルや自己主張の強さが、同一化意識が強い日本の学校においては、騒々しさや落ち着きのなさとして捉えられ、本人もそのように自身を認識するようになるのかもしれない。そして、そうした騒がしさや落ち着きのなさは周りのブラジル人からは批判の対象とはならず、結果的に煽られることになると考えられる。

散在地区に住むブラジル人児童

集住ブラジル人に比べ、「ひきこもり」得点と「攻撃性」得点が低い傾向にあるという結果が示された。これまで、散在地区のブラジル人児童に焦点を当てた研究は、教育学からも社会学からも少ないが、上述のように、白山(2008)は、ニューカマーの非集住地区においては、外国人児童生徒に対する共通理解がなく、個々の生徒が表出する課題に担任が試行錯誤すると述べている。また、直接的なデータとはいえないが、本調査を実施する際の学校側の反応として、散在地区の学校において、「調査対象児童への支援に必要なことを知りたい」と、数少ないブラジル人への支援策を求める積極性があった。つまり、共通理解がない故に、1人の生徒に対して個々に対応してもらえることになり、教師からの特別な注意を得ることができることを意味するのだろう。また、少人数であることで、日本語指導においてマンツーマンに近い補助を受けることができ、密接な関わりを得る機会が増える。その中で、教師や日本語指導担当者などから感情を汲んでもらいやすいため、抑うつ的、内向的になったり、落ち着きのなさが問題化したりすることなく、日常生活を送れているのだろうと思われる。

次に、家庭基盤の安定も関係していると考えられ

る。白山（2008）は集住地区に住むニューカマー児童の特徴の1つとして「家庭関係が複雑で困難な児童生徒の数が多し」ことをあげている。一方、非集住地区は「核家族で両親が揃っている場合が多い」と指摘されており、散在地区の方が、家庭基盤が安定しているため、同郷の存在がいなくても、不適応行動をとることなく生活できているとも考えられる。

そのほかにも、同郷の存在がない淋しさなどのネガティブな感情が、質問紙にはあらわれなかった理由として、自分が楽しく学校生活を送れていないことを意識化するのに抵抗があった、あるいは意識化・言語化できるほどの内省力がなかったと考えられる。あるいは、周囲にありのままの自分を受け止めてもらう器がないため、不適応行動を表出させるほどのエネルギーがなくなっているともいえるかもしれない。本当の自分を出すチャンスに乏しく、それに慣れているために質問紙ではやや過剰適応ぎみに回答することになったと推測できる。

ブラジル人の日本語能力による検討

地区差の関係なく日本語で日常会話ができるほどの言語能力がないと、「精神的な不健康」「ひきこもり」得点が高く、「学校生活」得点が低くなることが分かった。周りの日本人が何をいっているのかを理解できないということは、かなりのストレスにさらされている状態だといえるだろう。日本語能力が低いということは、学習についていけないだけでなく、状況把握もできないことを意味し、それが普段の子ども同士でのコミュニケーションや遊びをも阻害する要因になると考えられる。学習においても対人場面においても自己評価が下がり、自分を受け入れてもらえる感覚をもちづらく、安心して過ごせる場所、自分の役割がある場所として機能しないのだろうと推測できる。

最後に、質問紙において、集住地区のブラジル人児童は高い適応を示し、散在地区のブラジル人児童は低い適応を示すという仮説が支持されなかった背景について述べる。白山（2008）は、非集住地区のブラジル人児童に欠席が多いことを指摘し、1人で違和感を抱えながら適応の努力を続ける「しんどさ」

のあらわれであろうと述べている。しかし、本研究では、質問紙の回答においては、攻撃的行動得点・ひきこもり得点とともに、集住地区ブラジル人に比べて散在ブラジル人の方が低いという結果が示された。そしてQOLには違いはみられなかったことから、同郷児童の存在は心理適応と関係が薄いことが明らかとなった。つまり、ブラジル人の心理適応には、さらに影響力の強い要因があったり、ほかの要因も複合的に関係したりしていることが示唆される結果となった。

V. 今後の課題

本研究において対象となった学校は、さまざまな市町村で実施しており、学校ごとに特色が異なる。また、ブラジル人児童在籍率を切り口に地区を二分化した。地区ごとの土地柄なども考慮する必要があるだろう。さらに、児童の適応には、本人の日本語能力だけでなく、親の日本語能力や帰国意識などの将来設計といった保護者が抱える背景も関係していると思われる。また、教師がブラジル人児童に対してどのように対応しているか、対応したいかといった教師側の意識も児童の適応に影響を及ぼしているだろう。このように、ブラジル人児童を取り囲む他者の要因も視野に入れる必要があると思われる。

加えて、今回の調査は、実施に調査者が介入せず、児童の担任教師や日本語指導担当者が担った。担当者に個別に対応していただいた散在地区と、集団実施で行った集住地区では、実施条件にばらつきがあったといえる。学校の都合上、時間の制限が厳しくなってしまった背景があるため、時間の余裕をもった上での実施が必須となるといえる。

日本語の細かな表現の違いを十分に理解できなかった児童が多くいたであろうこと、十分な時間の確保ができなかったこと、また調査者が実施場面に携わっていなかったことなどが、今回の研究で既存のものと同様の尺度構成にならなかった背景にあると考えられる。そのため、これらの点をふまえ、言語的なハンディキャップの影響が少ないとされる投影法のアプローチや、既存の尺度構成に合わせた形での検討を含めて、さらなる詳細な研究をすすめて

いきたい。

参考文献

朝倉隆司 2005 日系ブラジル人児童生徒における日本での生活適応とストレス症状の関連—愛知県下2市の公立小・中学校における調査から 学校保健研究 46(6), 628-647.

藤田恵津子・小正浩徳 2002 来日外国人児童生徒の学校ストレスに関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集 44, 606.

古田真司・村田育世・水野由佳里・原郁水・村松常司 2011 滞日ブラジル人児童のストレスとレジリエンスについての検討 愛知教育大学紀要, 60, 53-62

古荘純一 2009 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 光文社

掛札綾 2004 日系ブラジル人生徒のメンタルヘルスに関する研究—異文化要因の影響からみた学校生活適応におけるリスクファクターについて— ところと文化 3(1), 67-72.

見島明 2006 ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人性との教育エスノグラフィー— 勁草書房

見玉憲一・倉地暁美・栗原慎二・島津明人・松下姫歌・杉岡正典・谷渕真也 2007 滞日ブラジル人生徒の教育・心理的支援に関する研究—非集住地区と集住地区の比較を中心に— 広島大学大学院教育学研究科 共同プロジェクト報告書, 5, 151-167.

松本真理子・丸山圭子・坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・蒔田玲子・畠垣智恵・森田美弥子 2011 小・中学校における外国籍の子どものQOL 日本心理臨床学会 第30会大会論文集, 394

松本真理子・丸山圭子・坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・蒔田玲子・畠垣智恵・森田美弥子 2011 小中学生のKSDにおける発達的变化 日本心理

臨床学会 第30会大会, 448

松本真理子・丸山圭子・坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・蒔田玲子・畠垣智恵・森田美弥子 2011 小中学生のKSDにおける外国籍の子どものQOL 日本心理臨床学会 第30会大会, 394

清水陸美・志水宏吉 2001 ニューカマーと教育：学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって 明石書店

清水陸美 2006 ニューカマーの子どもたち：学校と家族の間（はざま）の日常世界 勁草書房

新海英行・加藤良治・松本一子 2001 新版在日外国人の教育保障：愛知のブラジル人を中心に 大学教育出版

森田京子 2007 子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス：ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー

西田ひろ子 2011 ブラジル人生徒と日本人教員の異文化間コミュニケーション 風間書房

白山真澄 2008 「非集住地域」におけるニューカマー児童生徒—教育条件格差と支援の差異に注目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学 55(2), 135-151.

杉山 春 2008 移民環流—南米から帰ってくる日系人たち— 新潮社

杉岡正典 2007 滞日日系ブラジル人親子の進路意識と学校適応感との関連：地区間および学校間比較を中心に 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第3部, 教育人間科学関連領域 56, 263-272.

田中ネリ 2004 在日ラテンアメリカ人の子ども—その背景と支援— 異文化間教育 20, 29-39.

竹山典子・葛西真記子 2007 日本の公立小学校における外国人児童への心理的支援—取り出し指導と学級における支援からの一考察— カウンセリング研究 40, 324-334.

竹山典子 今田雄三 2009 コミュニティ心理学的アプローチによるニューカマー児童の支援